

優秀賞

僕の世界旅行

福岡県立修猷館高等学校 2年 田中 琉惺

「Hello !」

僕の世界旅行に、パスポートはいらない。海外に行くことが感染症の影響ではばかられる今の時代、僕はオンライン英会話で、パソコン越しに一日三十分の旅に出る。

僕は将来、国際協力を携わりたいと考えている。高校生である今、大層なことはできないが、オンライン英会話で、様々な「発展途上」と言われる地域の人とコミュニケーションをとることで、英語力を向上させると同時に、そのような地域のリアルな現状を直接学んでいる。それが僕の「未来に向けた小さな一歩」だ。

発展途上地域の情報は、本にも、インターネットにも、あらゆるところに溢れている。しかし、世界の現状をより正確に、深く知るためには、そのような二次情報だけでなく、現地の人話に直接触れることも大切だと、僕は思う。だから僕は、パソコンを挟んで、遠く離れた地域の人々と向かい合い、拙くも、一生懸命に英語でコミュニケーションをとる。

「あなたが、あなたの国でもっと改善していかなければいけない、と感じるのはどんな部分ですか。」

これは、僕がオンライン英会話で毎回尋ねる質問の一つだ。

この質問に対して、「まずインフラの整備が必要ね。」と答えるジンバブエの女性もいれば、「都会にばかり経済が集中していて、田舎に職が無いことが問題だ。」と返すフィリピンの男性もいた。

「経済やインフラを司る政府が、まずは変わらないといけない。」と、ザンビアの男性は言った。

彼らはいつも、現地の住人としての自身の考えを、このように自分の言葉で、明快に、丁寧に説明してくれる。

一口に「発展途上地域」といっても、それぞれの地域で、経済も政治も、状況が全く異なる。また、同じ地域に住んでいても、職業や収入などでその状況のとらえ方に差がある。

そこで、手軽に様々な人と交流できる、というオンライン英会話の特性を生かし、よりたくさんの人と同じテーマについて対話をする中で、多方面からの様々な意見、考え方を知ることが、僕は大切にしている。

そんな毎日の対話の中でも、一つ、心に残っている受け答えがある。

「もし、先進地域に住む私たちが、あなたたちのためにできることがあれば、それは何ですか。」

僕はこんな質問をフィリピンの男性にした。すると彼は、まっすぐなまなざしとともに、力強くこう答えた。

「あなたたちが私たちのために何かをしなくちゃならない、なんてことは全くないんだ。だけど、それでも何かしたいって言ってくれるのなら、職業の技術訓練なんかをして、安定した職がない人を減らしてほしいな。」

その言葉と語り方からは、他国に何かをしてもらうのではなく、あくまで自分たちの国は自分たちで良くしていくんだ、という強い気概が感じられた。そして、何かを「してあげよう」という上から目線な態度をとっていた自分の思い上がりに気づき、ハッとした。

このような経験、気付きも、現地の人と、「直接」向き合ったからこそ得られた、本やインターネットを通して得る平坦な情報をはるかに凌ぐ有益な「学び」だと思う。

僕はオンライン世界旅行で、このように、「たくさんの」人々と「直接」対話することで、多くの有益な学びを手にすることができている。これからも、感染症の影響は続くかもしれないが、そんな中で自分ができる精一杯の経験を提供してくれる、この大切な学びの手段を十分に生かしていきたい。

そして、いつか海外に行くことができるようになったら、今度は現地の人と隣り合って対話をし、意識の上で対等な、本当に役に立つ国際協力をしていこうと思う。今は、そのための小さな一歩を着実に。